
百合を愛でる人々

さゆ & 梨

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

百合を愛でる人々

【Nコード】

N8865X

【作者名】

さゆ&梨

【あらすじ】

継承式編前後？むしろ途中。 並盛中学校2年A組在籍中の、沢田綱吉と古里炎真がほのぼのとしているのをヨコシマな目で見つめてみるの巻。 妄想的視点で敢えて見ているので実際はこんな事実はないと思われます。

（前書き）

よくある（？）妄想の神秘。さゆと梨の合作。
「百合を（腐った眼で）愛でる人々」
正式なタイトルは

「はあゝあ…」

「何、どうしたの」

「…わたしさー、三次には興味なかったんだよ」

「唐突だな」

ある日の放課後。 方や委員会という正規の理由、方や行きたくないという非正規の理由で部活をサボり持ち込んだお菓子を食べていた二人の腐女子がいた。

「最近、転校生が来たじゃん」

「あー、何か地震の影響で元の中学に通えなくなったとか何とか？」

「そうそれ」

「で？」

「君も見たことあるでしょ、転校生」

「まあね」

二人がいるのは、正規の理由で部活をサボっている方の仲間が使っている教室から一番離れている、二階の端の教室。すぐ隣には情報室（またの名をパソコンルーム）がある。

「その一人、何かイジメにあってるとか噂の古里炎真君」

「え、何それ」

「…と、ついこの間までダメダメっ子で有名だった沢田綱吉君」

「ああ、彼」

二人ともアンタと同じクラスだね、と非正規の理由で部活をサボっている方が呟いた。

「イジメの方はねー、何か終息したとか噂だけど。その二人がさ、何かこう……アレなのね」

「…ああうん、アッチ系なのね」

「そうそう。アッチ系にしか見えないの」

「……アンタの頭が腐ってるせいじゃないの？」

「だから三次には興味なかったんだってば！！」

「過去形じゃん」

「うぐっ……」

そうなんだけど…と呟き、そっぽを向いていた彼女は、やがてぐいっと机の向こう側に座っている彼女に向かって身を乗り出した。

「な、何！？」

「些細なボデイタッチは当たり前、よろけたら支えてあげる、忘れ物の貸し借りはしょっちゅう、極めつけは身を挺してかばったりする」

「…うん」

「そんなの見てたら誰だって頭おかしくなるって！　ってかもつとあからさまにキヤーキヤー言ってる子とかいるし！！」

「……A組の女子は頭おかしい子ばっかなの？」

「知るかつつ　つっーか女子だけじゃないし！！」

「え、腐男子！？」

「………そこでそこまで飛んじやう君もさ、割と毒されてるよね」
「へ、あ、え??」

若干白い目を向けられ、やや混乱している彼女は演劇部員だった。もう片方は吹奏楽部員だ。

「“何かアイツら仲良すぎじゃね？”とか、そんな感じの囁きがち

らほら聞こえるだけだよ、男子は」

「……女子はアッチ系ばっかってことね」
「まあねえ」

はあ、と遠い目をする吹奏楽部員。

「でもさあ、あれはそういう目も向けたくなるよ。沢田君って言えば、元転校生の獄寺君とか野球部の山本君とか果ては彼の風紀委員長様とかと色々噂されてたけど、今回ののはもっと凄いもん」

「ちよつと待て色々気になったけど“風紀委員長様とかと”とか“噂されてた”って何だよ!？」

「君も知ってるでしょー、うちの学校の腐女子の巣窟」

「…美術部？」

「そそ。わたしの小学校時代からの親友が在籍中。そんな噂があるって教えてくれたの。あ、その子も同じクラスね」

ちなみに二人の繋がりは今のところ吹奏楽部員のみ全期制覇している図書委員会である。

「恐るべし腐女子……」

「妄想の為なら『並盛の秩序』様すら恐れるに足らず。……まあそもそもその逆鱗に触れるようなことしないけどね」

全員が模範生だし。

「だから逆に恐ろしいんじゃない……?」
「……そだね」

溜め息が重なる。

「ってヤバッ、そろそろ行かないとパーリーキレルッ!」

「アンタそうやって慌てるなら最初っからサボらなきゃいいものを……」

「何事にも息抜きは必要なんですー うちの部活って日曜だってあるんだよ? 死ねって言っの?」

「ハイハイ。早く行きなさい」

（パーリー＝パートリーダー。吹奏楽部における役職の一つ。平の部員をまとめる役割。）

ガラッ!!

「ちょっと聞いて!! ……あれ?」
「何しに来たのアンタ」

情報室の扉を勢いよくあけた例の吹奏楽部員は、目的の存在と別にもう一人人影を見つけ、邪魔をしたかと慌てた。

「いや、その…ちよつと、失礼します…」

「ちよおつと待った」

がしつと肩を掴まれ吹奏楽部員は小さく悲鳴を上げた。

「あー先輩、その子肩とか首筋とか背中とか弱いんで勘弁してあげてクダサイ」

「あら、そうなの？」

「ああああの…何デシヨウ…」

どうやら三年生らしい相手に、カチコチになる吹奏楽部員。

「アナタ、2年A組よね？」

「…そうですね」

「今日、風紀委員長がアナタのクラスの人間を呼び出してたじゃない」

（沢田君と古里君のことだ…）「はあ、そうでしたね」

「その理由が、風紀委員長と新設の…何だっけ。何かの委員会の委員長とが揉めたからって噂があるんだけど、ほんと？」

「はい？ …知りませんよそんなこと！？」

「チツ… 同じクラスなら何か知ってるかと思ったのに…」

っていつか三年生ってもう委員会無い時期だよな今…と思いつつ、吹奏楽部員はぽそりと言った。

「…教室に戻ってきた二人が話してたことを総合すると、“風紀委員長と肅清委員長が揉めたのを第三者の介入で二人に丸投げして決

着をつけさせた”ってことらしいですが」

一体何で揉めたのかとか、第三者って誰とか、決着をつけたってどうやったのか、そういう詳しいことは知りません。

「へえーえ。どおして？」

（この先輩コワイ…）「方や曖昧な笑みで口籠り、方やそんな彼の陰に隠れるようにしていて。…女子の盛り上がりようが凄かったですよ」

ふと思つて付け足した言葉に、先輩はニタアリと笑顔を見せた。

「ふうん… ありがとね」

言葉とともに出て行ってしまった彼女に、吹奏楽部員は完全空気と化していた友人（例の演劇部員であり現情報委員）に泣きついた。

「何アレ誰アレエ?!?!?」

「落ち着け。あの人は前期の情報委員長。」

「…あの腐女子の第二の巣窟と言われる情報委員会の前委員長…?!?!?」

「どこから来たんだその噂…」

「美術部。だってあれでしょ、風紀委員長に口で勝ったって噂されてるあの人でしょ、しかも理由は×切間近の寝不足とかいう!!」

「大正解。…スゲエな美術部。その情報網に感心するわ」

演劇部員の呆れたような台詞に、吹奏楽部員は滲んでいる涙を拭いつつ言った。

「さっきね、Hし終わった後もその話でずっと詰め寄られてたのよ、

沢田君と古里君」

「へー」

「沢田君の前には獄寺君と山本君が間に入ってたんだけど、ついに押されて古里君が躓いてこけたのね。とっさに沢田君が引き寄せたの。そこで一部女子がキヤー。ナチュラルに心配する言葉をかけるもんだから更にキヤー。そこに偶然だと良いけど古里君がちよつと赤くなつて返事するもんだからもつとキヤー。そこへ笹川さんが乱入してクラスの一部がギヤー。」

「…笹川さん？」

「笹川京子さん。聞いたことない？」

「…ああ、学年のアイドル。」

「そうそれ。」

ちよつと興奮している吹奏楽部員に、冷静であろうと努めているが演劇部員の方も若干興奮していた。さすがは腐女子。（↑

「…で、何でギヤー？」

「見ようによつては高嶺の花三つ。見ようによつてはあるカップルに紛れ込む邪魔者。見ようによつては高嶺の花がクラスの底辺にいる人間に近づいている」

「…ああ、だからギヤー…」

遠い目をする二人。…一気に熱は冷めたようだ。

「…月、変わったじゃん」

「？ うん」

「うちのクラス、席替え月末なんだけどね」

「…何となく読めた気がするけど、うん」

「……女子生徒の団結力って凄いよね。…沢田君の隣、古里君にまんまと仕立て上げたんだ…」

「“腐”が抜けてないか？ “まんまと”って…何したんだよ…」

「……籤の、すり替え？」

「……………うん、もう何も聞かない」

遠い目が黄昏に至っているのを見て溜め息をついた演劇部員は、額に手を当てて立ち上がった。

「行くの？」

「ああ、行く…ええと、明日何だっけ…」

「数学と社会。」

「うへえ…」

実は定期テスト期間中だったりした。

「……世の中、開き直った女性ほど怖いものはないよね……」
「何、いきなり」

「君も知ってるんじゃないの…？」2年A組のユリを愛でる会」
「ああ、あれねえ…、まああの二人は薔薇って言っより百合だわな」
「そこじゃねーよ」

放課後の図書室。例によって委員会という正規の理由でサボっている吹奏楽部員と、顧問の都合で部活が休みになった演劇部員は、司書教諭の頼みでカウンターに座っていた。

「休み時間のうちのクラス前の廊下の女子率絶対上がったって…」
「最近じゃああれだよ、屋上に監視カメラつけようって話も出るんだよね」

「あの派手なメンバーで屋上陣取って昼食べてるんだもんね…」
ふう、と盛大な吐息が重なる。

「……噂だけどさ、女性教師の一部も参加してるとか」
「さすがは国民の三分の一の女性が腐女子という噂の日本」
「…それマジ？」
「うそ。」

何だあもう…、と呟いた吹奏楽部員は、貸し出しを申し出てきた下級生に笑顔で応じる。さすがは全期コンプリート中。板についている。

作業を終えた彼女は、ぽつりと言った。

「球技大会さ、あの二人、バレーなんだよ」
「へえ」

「バレーってさ、慣れてないと腕の内側内出血するじゃん。暑いからって半袖になってたからさ、赤くなってるさ、それ見て痛そうにするのを大丈夫って互いに言い合ってる二人とか」

「…はあ」

「例によって顔で受け止めちゃって、倒れるのを受け止めたりとか」

「…へえ」

「上手くサーブ入ったり点数入れたりとかしてハイタッチとか」

「…うん」

「練習なのにそれで萌えちゃって黄色い声のうるさい体育館、球技大会本番まで続くんだろっうなあ、って…」

「…そうだね…」

「ってかむしろ本番はもつと凄いのが待ち構えててそっで怖いんだけど。」

「…あー。」

何かさ、これでハイテンションになるのも疲れたっていうかこっちがハイになる前になる連中がたくさんいてもうついてけないというか…

「ありがとう、二人とも」

「「あ、先生」」

戻ってきた司書教諭にお疲れ様、と言われ、はいどういたしまして、とカウンターから出る二人。

「ところで、今ユリ会の話してた？」

「…先生も会のお一人で？」

「いーえ。私じゃなくて二年生の学年主任がね。同期なんだけど、元情報委員長と仲良いのよね」

「…世界は狭い…」

「…つづーか未恐ろしい…」

「私はただのしがない一物書きなんだけど、ノれたら特に好きでもないジャンルであろうと書けるもんだから、あの人に良い様に使わ

れてるの」

（…先生。それもう“しがない”の域超えてます。）

はふ、と頼杖をつきながらの台詞に、二人の内心は重なった。

ちなみに言わずともわかるだろうが二年の学年主任は女性である。

ちなみに。

『キヤ——————————！！』

！！！！

「ええ…」

「マジでか…」

球技大会本番。前代未聞の観客の集まったバレーの会場である第二体育館では、沢田綱吉少年がボールを鳩尾に受けて失神、それを某野球部の少年が（何故か）お姫様抱っこで運び、それに古里炎真少年が涙を滲ませながら声をかけつつついていく、という空前絶後の光景が見られた。

「…っていうかあれだよね、姫抱きって要素より百合要素に頭がいく辺りみんな頭おかしいよね…」

「全くだね…」

そして、とある放課後。

「…まだ終結しないね、百合熱」

「まあ良くも悪くも熱しやすく冷めやすいのが腐女子の特徴でもあるから、そのうち凍結するんじゃない」

「終結じゃなくて凍結かよ」

二人は漫画喫茶にいた。

「だって腐女子の大半って良くも悪くも熱しやすく冷めやすいのが多いじゃん」

「…まあ、ね…」

「ある意味わたしが発端だった気がするけどねー」

「あたしらも一腐女子でしかないからね…」

結局三次から二次に戻ってきたし

「あ、次のコミケどーするよ?」

「えっとねー」

・ ・ ・ e n d ・ ・
(糸冬 われ !)

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n8865x/>

百合を愛でる人々

2011年11月15日03時03分発行